

季刊

博物館だより

FUKUSHIMA MUSEUM
QUARTERLY

URL <http://www.general-museum.fks.ed.jp>

67

冬の収蔵資料品展

長井前ノ山古墳と
周辺の遺跡

福島県立博物館



長井前ノ山古墳の合掌形石室

長井前ノ山古墳は、河沼郡会津坂下町にある前方後円墳で、福島県立博物館が平成一〇年から調査をおこなってきました。今回の展示は、長井前ノ山古墳の調査成果を速報として紹介するものです。

長井前ノ山古墳の大きさは全長三六mで、前方後円墳としては小型の部類に属します。大きな古墳が多い会津盆地の中では、ベストテンにも入りません。しかし、発掘の結果は私たちの予想を大きく超えるものでした。

第一の成果は、遺体を収めた埋葬施設が「合掌形石室」と呼ばれるものであったことです。これは、板石を組み合わせた石棺の一種で、天井（蓋）の石が家の屋根のような形に組まれることが特徴です。この構造から、古墳がつくられたのが西暦五世紀前半ごろであることもわかりました。合掌形石室は、長野県に五〇例ほどが確認される以外にほとんど例がなく、福島県内でははじめて確認されました。また、合掌形石室が前方後円墳にもなった例は、全国でこの古墳が唯一です。さらに、東北地方では五世紀前半の古墳がほとんど確認されておらず、この時期の前方後円墳としてきわめて重要な存在になっています。

このような結果から、副葬品の内容にも大いに期待がかかりました。しかし、中世（一三世紀ごろ）に石棺が一度開けられ、その際に大半が持ち出されたらしく、副葬品とみられるものは、錫製の小玉や鉄片などごくわずかであった点は惜しまれます。

一方、中世に石棺が開けられたのち、ここに陶器の壺や仏具が納められ、再び埋められていました。これは、経典を納めた経塚もしくは火葬墓と考えられます。つまり古墳が中世に再利用されていたわけですが、会津盆地あるいは福島県で経塚や火葬墓が正式に発掘調査された例はかぎられ、この点でも貴重な成果となりました。

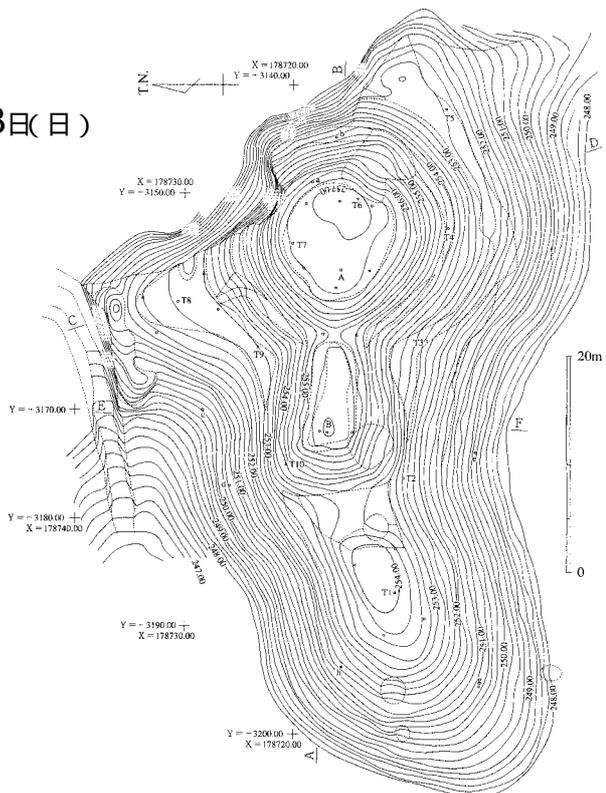
収蔵資料品展

長井前ノ山古墳と 周辺の遺跡

会期 平成15年2月1日(土)~3月23日(日)



遺体を収めた石棺



長井前ノ山古墳全体図

今回の展示では、調査の成果や進行状況を、写真パネルや解説文をもちいて詳しく紹介します。また、前ノ山古墳の出土遺物とともに、関連する周辺の遺跡の出土遺物を展示します。これらをつづけて、会津盆地の西縁部に、古墳時代と中世の重要な遺跡が営まれた背景に迫りたいと思います。

みなさま、どうぞお越しください。



石棺の中から中世の壺が出土したようす

収蔵資料品展《長井前ノ山古墳と周辺の遺跡》は平成一五年二月一日(土)から三月三日(日)まで開催しています。観覧料、常設展観覧料でご利用いただけます。



出土した中世の壺と青銅製独鈷杵

収蔵資料品展開連行事のお知らせ

考古学講座「長井前ノ山古墳の発掘調査」

講師 学芸員 菊地芳朗

日時 平成一五年二月九日(日)午後一時三〇分より

場所 県立博物館講堂(入場無料)

展示解説会

講師 学芸員 菊地芳朗

日時 平成一五年三月一日(土)午後二時より

場所 収蔵資料展示室(常設展チケットをお買い求めください)

講座紹介 うるしの技に挑戦

平成一四年九月二日(日)～平成一四年二月三日(日)

全八回

第一回 講師 福島県立博物館学芸員 小林めぐみ
第二回～四回 講師 伝統工芸士 大沢 周一

第五回 講師 会津短期大学教授 須藤 紀雄
第六回～八回 講師 伝統工芸士 大沢 周一

博物館では、一年を通じて様々な講座を開催しています。草木染や麻糸作りなどの実技講座や、館長が開館より行っています金曜講座、歴史分野の古文書講座、考古学講座、自然史講座、民俗講座、美術講座など内容は多岐にわたります。

ここでは、昨年の実技講座「蒔絵」のグレードアップ版として今年の九月から始まりました美術分野の実技講座「うるしの技に挑戦」の様子をご紹介します。

一昔前に比べると椀や皿などの食器類はやきものやガラスの比重が大きくなり、塗物の影は薄くなってきてしまいました。この実技講座は、福島の工芸品の代表でもある会津塗の良さを再認識して欲しいというところから始まりました。漆のことを少しでも身近に感じるには、自分で制作してみるのが一番です。そこで漆工品制作の実技に、知識として会津塗の歴史の講義と、プロの技を見学する会津若松市内の工房探検を加えました。欲張った内容の実技講座は全八回の連続講座になりました。

第一回目は



パネル製作中



拭き漆の皿のお手本を見ている様子

「会津塗の歴史」についての講義で、スライドを使って現存している会津の漆工品を紹介しながら、参加者が実際に制作する会津塗の技法がどのような歴史の流れの中で発展してきたのかをお話しました。

第二回目からが制作です。伝統工芸士の大沢周一氏を講師にお迎えしました。課題は二つ。一つは、一四〇×七〇の黒漆塗りのパネルに、会津塗特有の技法である「朱磨き」という朱色の粉を漆で時きつける方法と、金箔を粉状にした消粉という金粉を時き、「消粉蒔絵」で各自の好きなデザインを描くもの。黒の地色に朱と金の鮮やかなコントラストを効果的に見せるデザインが思案のしどころです。もう一つは顔料を混ぜない漆を塗っては余分な漆をふき取る「拭き漆」の皿。直径一八〇の椀の皿は、色を付けていない生漆を塗り重ねていくことで木目の美しい鉛色になっていきます。

湿度を与えることによって乾く漆の性質や、漆を接着剤代わりにして朱や金の粉を附着させる「蒔く」という作業の流れ、「蒔く」にも漆の乾き具合を見計らったタイミングが必要であることなど、参加者の皆さんは実体

験の中から様々なことを吸収しているようです。

第五回では、会津短期大学教授の須藤紀雄氏の案内で、新しい漆の技術を開発している福島県八イテックプラザ会津若松技術支援センターと会津若松市内の蒔絵師さんと木地師さんの工房を訪ねました。博物館でおこなっているのは初心者向けの簡易版の内容です。プロが使う道具、材料、そして体験してみたからこそわかるプロの技術の凄さに、息を飲んだり、質問が繰り返されたりと、参加者の皆さんの熱意は、主催者側も驚くほどでした。



工房探検の様子

第六回から再び制作に戻り、第八回で作品を完成させます。パネルは朱と金の使い方によってそれぞれに個性のある仕上がりになってきました。例えば花を朱にして茎を金にしたパネルと花を金にして茎と葉を朱にしたパネルでは印象が全く異なります。椀の皿も漆の拭き取り方や選んだ皿の木目が詰んでいるかどうかによって一枚一枚が異なる色合いになっていきます。

九月下旬から一二月下旬までの三ヶ月に渡る長い期間、熱心に参加して下さった皆さんが講座を楽しんで、そして漆工品に少しでも関心を持っていただけたならと願っています。

(美術担当 小林めぐみ)



パネルもできてきました

ムラ境の神 藁人形

佐々木長生 民俗担当

ムラ境と神

ムラ(村)といった場合、一般には住宅が建ち並んだ集落をさして呼ぶ場合が多い。柳田国男は、ムラ概念を「民居の一集団即ち宅地の有る部分」と定義し、「村民が耕作する田圃乃至は其利用する山林原野は即ち単に其村に属する土地である」としている。これに対し福田アジオ氏は、集落(ムラ)と田圃(ノラ)と山林・原野(ヤマ)の三領域を同じ円的構造のものとしてとらえ、これら三領域を含んだ範囲をムラとして定義づけている。このようなムラは、中世末から近世の大間検地および各藩主の検地によって生みだされたものであるという。村人に認識されるムラは、住宅の集中する領域で、その外縁のノラとの境がムラ境となる。ある一定の範囲に区切られたムラは、家と家との密接な交際を保ち、そこには生活・生産に関する共同慣行や互助組織があり、家連合による共同体生活を営んできた。村人たちは村における生活と生産の維持のための社会関係を形成し、その象徴として氏神をまつた。村人は氏子として、鎮守や産土の神をまつり、五穀豊穡や収穫感謝・悪霊退散などの共同祈願を行ってきた。すなわち、ムラの神であり、ムラの祭りである。ムラの祭りで重要な役割を果たすが、ムラ境である。

ムラ境の認識

村人にとってムラが生活の場であり、ノラ・ヤマは生産の場となる。特にムラとノラの境のムラ境には、地蔵様が立っていたり、一本杉があったりして、村人たちにとっては大切な空間として認識されている。ムラには「わがムラ」といった共同体意識が強く、「よそから来る

者」に対しては特に注意する慣習がある。それは悪人のみならず、流行病や害虫などを引き起こす悪霊邪神をムラの外からムラ内に入るのを防ぐという概念が特に強い。「道切り」とか「八丁注連」といって、ムラの入口に笹竹を立て、そこに注連縄を張ったり、大わらじをあげたりする習俗がよく見られる。これはムラの領域を明示したもので、ムラ外から来る者に対してのみならず、ムラ内から出る者に対しても警戒心と気の引き締めをいだけさせた。このようにムラ境は、村人にとってムラ内に進入する悪霊邪神をさえぎり、ムラ内の悪霊を追い出す場であった。これらの機能により、ムラの安全が保たれてきたという認識が、村人に強くあるといえる。

ムラ境の神と祭り

村人にとってムラ境は、「おらがムラに悪霊が来ぬように」、「ムラより悪霊を追い払う」といった儀礼を行う場であった。小正月のサイの神焼き(ドンド焼)・夏の虫送り・二百十日の風祭りなどの年中行事や、祭祀における神輿渡御や坂(境)迎えなど、さまざまな儀礼が厳肅に行われてきた。村人は、ムラ境を強く意識することはないが、心意的には聖なる空間として意識してきている。以下、ムラ境の神と祭りについて藁人形を中心として簡単に述べてみたい。

東北地方におけるムラ境の神として注目されるものに、ニンギョウサマ(人形様)とかカシマサマ(鹿島様)・シヨウキサマ(鍾馗様)などと呼ばれる藁人形が



田村郡船引町屋形の「お人形様」

ある。これらは、春の百万遍や虫送り・風祭りなどの祭りに村人によって作られ、ムラ境に立てられる。福島県内では、田村郡船引町の旧警城街道沿いに立つ「お人形様」が有名である。鬼のようなこわい形相、薙刀や刀を持ち両手で悪霊の進入を防ぐような形のものが多い。形も一尺程度のものから等身大、五メートルにもおよぶ大型のものなどさまざまである。疫病や害虫などムラ内の悪霊を藁人形に託し、村人たちの手によってムラ境に立てられる。悪霊のついた藁人形がムラ境で、ムラ外から来る悪霊邪神退散の守護神としての機能をもつようになる。すなわち道祖神としての機能を持つのである。神野善治氏は、これらの藁人形を「人形道祖神」と命名し、「境の神」として位置づけられている。人形道祖神が東日本、特に東北地方に多く見られるのに対し神野氏は、「中部日本などに発達している石像や石神の道祖神(賽の神、道祖神など)では、すでに見分けることがむずかしくなりつつある境の神としての本質が東日本の藁人形の周辺には明確に伝承されているのである」と述べられている。東北地方の藁人形を概観すると、次のようなときにムラ境に立てられる。(一)春の悪霊疫病送り(ホーの神・厄払い人形等)、(二)百万遍(会津地方および新潟県東蒲原郡の鍾馗様)、(三)天王祭り(いわき地方)、(四)虫送り(青森・岩手県等)、(五)鹿島送り(秋田県)、(六)風神祭り(浅川町の風袋様)などがある。このようにさまざまな祭りにおいて藁人形が作られ、ムラ境に立てられまつられている。これらに共通する点は、悪霊邪神退散という道祖神的性格を持つもので、神野氏が提唱する「人形道祖神」といえるよう。

参考文献

柳田国男『時代と農政』、『定本柳田国男集』16 昭和四四年、福田アジオ『日本村落の民俗的構造』(昭和五七年)、福島県立博物館企画展図録『境の神・風の神』(昭和六三年)、神野善治『藁人形の民俗 境の神像成立』、『境の神・風の神』等。

Q：博物館の正面の入口に向かって右側の建物には窓があるのに、左側の建物には窓がないのはどうしてでしょうか。

A：おもしろいことに気が付きましたね。

当館の構造(図 1)を見ていただくと解るのですが、中央部のエントランス部分を境として、正面に向かって右側の建物と左側の建物ではその機能が大きく異なります。

左側の建物は、そのスペースの殆どが資料を展示している展示室です。右側の建物は、展示室とは異なり博物館の職員が事務的な仕事や調査研究をおこなうためのスペース(事務室、研究室など)あるいは展示していない資料を保管している収蔵庫などです。

では、なぜ展示室に窓が無いのかといいますと、基本的には資料の保護のためです。博物館では、資料を展示し多くの方々に見ていただくと共に資料が傷まないように保管し長く後世に伝えるという役割ももっています。このため、資料を展示しているあいだも資料ができるだけ傷まないような環境で展示しているのです。

もし、展示室に窓があった場合どのような影響があるかといいますと次のようなことが考えられます。まず、第一に屋外からの光(自然光)の差し込みです。自然光には、可視光線以外に紫外線や赤外線が含まれています。窓があるところらの光が展示室に差し込むことになり、紫外線が資料などに当たり続けると資料の色が変色したり褪色したりします。赤外線があた

松田隆嗣
担当者
Q & A
回答者

図 - 1 当館一階平面図

正面入口に向って左側の建物は展示室、右側は収蔵庫と事務室、研究室など。建物の中央に収蔵庫が配置されている。

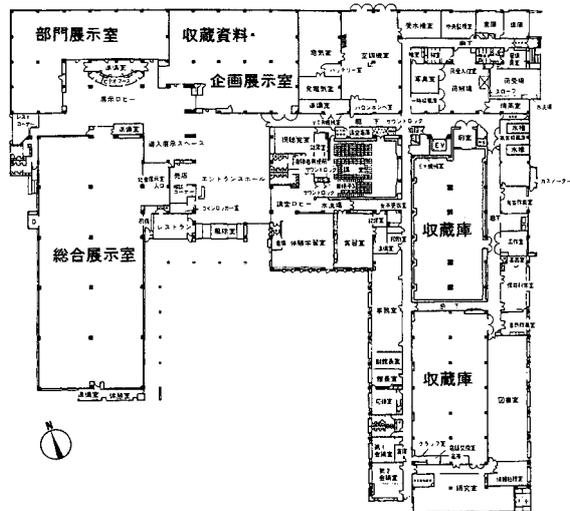


写真 - 1 総合展示室内の状況
展示室内に窓はない。



たところは部分的に温度の上昇を起すためその部分が乾燥し収縮や変形を起します。また、可視光線も必ずしも安全ではなく光があたり続けると紫外線や赤外線と同様に変褪色や乾燥による変形などが起こります。また、窓の構造にもよりますが、場合によっては窓からの外気の流入により屋内の温度と湿度が影響を受け、部分的な結露や乾燥が生じます。もう少し大きな隙間であれば、その隙間を通して虫や小動物などが侵入してくるといったことも起こります。

このようなことから、当館の展示室では、展示しているあいだに屋外から差し込んだ光などにより資料が傷むことがないよう窓のない構造となっているのです。

また、展示室とは別に資料を保管している収蔵庫について見ると、収蔵庫は右側の建物のほぼ中央にあります。この部屋は、窓が全くない部屋であることはいうまでもありませんが、収蔵庫の周囲には廊下とその外側に事務室や研究室、図書室、会議室などが配置されているため外界からの気温や湿度の影響受けにくく、年間を通じて温度・湿度の変化が起こりにくい構造となっています。

このように、当館では、各部屋の用途によりその部屋の使用目的に適切と思われる設計となっているのです。

トピックス

平成一四年度福島県立博物館移動博物館

『武家のこころ・かたち』

県立博物館の収蔵品を皆さんのまちで展示する「移動博物館」が今年から始まりました。第一回目の今年は、白河市の白河集古苑を会場として、「武家のこころ・かたち」をテーマに福島の武家文化の側面を紹介する展示を行いました。

一〇月二日から十一月一七日までの開催期間中には、大勢の観覧者に足を運んでいただきました。嬉しい限りです。三回行った学芸員によるギャラリートークでも参加者の方たちは大変熱心で、トークの中で次々にでる質問にお答えしたり、学芸員もつい話に熱が入ったりと内容の濃いギャラリートークとなりました。

今後も一年に一度、福島県内の市町村のご協力をいただいで移動博物館を行っていく予定です。戦国武将の白河結城氏や大名の阿部家や松平家にゆかりのある白河で武家文化の展示を行ったように、それぞれの市町村の特徴を活かした展示ができればと考えています。

博物館のある会津若松はちょっと遠いなあ、とお思いの方、そのうち移動博物館が近くにお邪魔するかもしれません。その際には是非ご来場下さい。



春の収蔵資料品展予告

「鈴木舜一鉱物コレクション展」

当館では、会津若松市のご出身で東北大学名誉教授の鈴木舜一氏より、同氏が長年の研究生活の間に収集された多数の地学標本類を一括してご寄贈いただきました。同氏は東北大学工学部資源工学科で長らく資源地質学に関する研究・教育に当たられた方です。

ご寄贈いただいたコレクションの総数は一五八二点に上ります。その中心となるのは、かつて日本各地の金属鉱山で採掘された鉱物・鉱石標本です。それらのほとんどは、今後けつして入手することのできない貴重な標本類で占められています。

この度コレクションの整理が終了したので、標記の収蔵資料品展としてご紹介する次第です。経済事情や地球環境などと関連して、地下資源に対する新たな視点が求められるこの頃です。この展示では、かつて私たちの身近で採掘されていた鉱石を前に、資源と私たちの生活について振り返ってみたいと思います。



方解石 宮城県鷺沢町 細倉鉱山

収蔵資料品展（鈴木舜一鉱物コレクション展）は平成一五年四月二六日から六月一五日まで
観覧料 常設展観覧料でご覧いただけます。

常設展 歴史・美術テーマ展示

「画題で見る美術 唐人物」

会期 二月一〇日(火)から

二月二六日(日)まで

「酒のうつわ」

会期 二月四日(火)から三月三〇日(日)まで

講演・講座

実技講座

「古文書入門10 中世」

講師 当館学芸員 高橋 充

日時 一月二五日(土)午後二時

「古文書入門11 中世」

講師 当館学芸員 高橋 充

日時 二月二日(土)午後二時

「古文書入門12 中世」

講師 当館学芸員 高橋 充

日時 三月二日(土)午後二時

「わらわづりをつくらう」

講師 技術伝承者 鈴木幸雄さん

日時 二月八日(土)午前一〇時

総合講座「シリーズ 髷梯山を語る」

第一回「髷梯山の火山活動」

講師 当館学芸員 竹谷陽二郎

日時 一月二二日(日)午後一時半

第二回「髷梯山麓の遺跡」

講師 当館学芸員 藤原妃敏

日時 一月二六日(日)午後一時半

第三回「髷梯山麓の仏教文化

恵日寺を中心として」

講師 当館学芸課長 若林 繁
日時 二月二日(日)午後一時半
第四回「髷梯山麓の民具」

講師 当館学芸員 佐々木長生

日時 二月一六日(日)午後一時半

第五回「髷梯山麓の古代」

講師 当館学芸員 佐藤洋一

日時 三月二日(日)午後一時半

第六回「噴火後の報道」

復興の努力と観光名所会津髷梯山

講師 当館学芸員 南雲 修

日時 三月一六日(日)午後一時半

美術講座

「福島の仏像29」

講師 当館学芸課長 若林 繁

日時 一月一八日(土)午後一時半

「福島の仏像30」

講師 当館学芸課長 若林 繁

日時 三月一五日(土)午後一時半

考古学講座

「長井前ノ山古墳の発掘調査」

講師 当館学芸員 菊地芳朗

日時 二月九日(日)午後一時半

収蔵資料品展览展示解説会

講師 当館学芸員 菊地芳朗

日時 三月一日(土)午後二時

場所 収蔵資料展示室

(常設展チケットをお買い求めください。)

民俗講座

「雪国の民俗 奥会津の雪と生活」

講師 当館学芸員 佐々木長生

日時 二月三日(日)午後二時

歴史講座

「ニューズ映画で見る福島の歴史」

講師 当館学芸員 南雲 修
日時 三月九日(日)午後二時
展示解説員講座

「手すき和紙で遊ぼう」

講師 当館展示解説員

日時 一月二五日(土)午後一時半

「おもちやをつくらう」

講師 当館展示解説員

日時 三月八日(土)午後一時半

金曜講座

場所 講堂 入場無料

郷土学習を而篇 地方の時代の地方学習

第一九回

「証言『相馬藩』」

日時 一月一〇日(金)午後一時半

第二〇回

「寺西八箇条 境代言」

日時 一月二四日(金)午後一時半

第二一回

「会津農書の重み」

日時 二月一四日(金)午後一時半

第二二回

「近代を先がけて」

日時 二月二八日(金)午後一時半

第二三回

「白河以北一山百文」

日時 三月一四日(金)午後一時半

第二四回

「近代かくし文化の人びと」

日時 三月二八日(金)午後一時半

実演

場所 体験学習室 入場無料

「昔語り」

語り部 横山幸子さん

日時 三月二三日(日)

語り部 山田登志美さん

日時 三月三〇日(日)

* 実演は、午前十時半からと午後一時からの二回行われます。

常設展無料開放日

* 小・中学生、高校生は学校が休みの日は、常設展示室が無料開放されます。

1-3月の休館日

年末年始

二月二八日(土)～一月四日(土)

一月 六日(月)・一四日(火)・二〇日(月)

二月 二七日(月)

二月 三日(月)・一〇日(月)・二二日(水)

二月 一七日(月)・二四日(月)

三月 三日(月)・一〇日(月)・一七日(月)

三月 二四日(月)・三一日(月)